

平成18年12月8日

報道関係各位

日本女子大学

「第二回 平塚らいてう賞」 受賞者決定

～顕彰（1件）「海南友子氏」、奨励（2件）「近藤未佳子氏、菊地栄氏」～

日本女子大学（学長 後藤祥子）は、本年5月から9月まで募集していた「第二回 平塚らいてう賞」の受賞者を人権週間でもある12月8日（金）に発表した。

「平塚らいてう賞」は、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏（1906年日本女子大学卒業）の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対する顕彰と奨励をはかることを目的に昨年創設したものである。募集にあたっては、本趣旨を社会に広く伝えまた今後の活動が進展することを願って、全国で研究や活動を行なっている個人または団体を対象としている。

第二回は顕彰4件、奨励8件合計12件の応募があり、厳正な審査の結果、顕彰1件、奨励2件が決定した。顕彰は、これまで際立った功績をあげた者に授与され、奨励は、研究や活動を継続的行なっている者、あるいは新たに取組もうとしている者に授与される。

今回も前回同様、高い専門性による研究や、全国的組織あるいは地域密着型の市民活動まで、多岐にわたる分野で、いずれも感動・敬服に値するものであった。受賞者は以下の通り。

- 受賞者 1. 顕彰（1件） 海南友子氏（ドキュメンタリー映画監督）
- 2. 奨励（2件） 近藤未佳子氏（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
菊地 栄氏（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科）

* 「第二回平塚らいてう賞」選考委員発表コメントは別紙の通りである。

なお、贈賞式は、2007年2月10日（土）14時より、日本女子大学 新泉山館において行なわれる。

<選考委員>

- 後藤 祥子 [日本女子大学学長]
- 中嶋 邦 [平塚らいてうの記録映画を上映する会会長]
- 杉森 長子 [平和・人権教育・研究センター代表]
- 羽田 澄子 [映画監督]
- 出淵 敬子 [WILPF（婦人国際平和自由連盟）日本支部会長]

（この件に関するお問い合わせ先）

日本女子大学 広報渉外課内 平塚らいてう賞事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
TEL : 03-5981-3162、FAX : 03-5981-3164
Eメール : raiteu@atlas.jwu.ac.jp
HP : http://www.jwu.ac.jp/raiteu

学校法人 日本女子大学 総務部 広報渉外課

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1 Tel : 03-5981-3162・3163 Fax : 03-5981-3164

「第二回 平塚らいてう賞」選考委員発表コメント

第二回受賞者の選考にあたり、私どもは、候補者の業績を広く、世界の女性のさらなる解放、問題の解決、平和問題や地域社会への公正な目配りと着実な行動の継続という観点から論議し、以下の諸業績に対して、「顕彰」と「奨励」に値するとの結論に達しました。それぞれのご業績の特色や報奨に値する観点は下記の通りです。

< 顕 彰 >

受賞者：海南 友子氏 （ドキュメンタリー映画監督）

海南氏は、大学で歴史学を専攻し、社会では7年間、報道ディレクターの仕事をして独立し、ドキュメンタリー映画製作を開始した。2001年、『マルディエム 彼女の人生に起きたこと』、2004年、『にがい涙の大地から』を次々製作し、世界各地のドキュメンタリー映画祭に出品して評価され、平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞(2004年)、黒田清日本ジャーナリスト会議新人賞(2005年)を授与された。氏の作品はいずれも、未だに解決できない戦争と平和の避け難い諸問題を取り上げ、その実情を検証し、問題の重要性を世に訴えている。若い世代に属する氏の発言が映像化され、世に出ることの意義は大きい。さらに氏は、製作映画の基盤となる資料を著作、『地球が危ない』(幻冬社)、『未来創造としての戦後(補償)』(現代人文社)、『ドキュメンタリーの力』(子どもの未来社)にまとめ、映像の背景には真摯な資料研究の存在が不可欠であることを示している。総じて、日本はもとより国際社会で高く評価されるには、氏の持つドキュメンタリー映画製作者としての情熱と技量、優れた歴史感覚、さらに、日本人として女性として、今、考えるべき問題を直視し、「映画」という方法で世に訴える勇気が評価されたのであろう。平塚らいてうが生涯持ち続けた美点と一致するものが、海南氏のドキュメンタリー製作と作品に限りなく見出せる。

< 奨 励 >

受賞者：近藤 未佳子氏 （東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）

本研究の優れた特徴は、都市計画と女性の関わりを歴史的社会的工学的視点から探求し、ジェンダーの問題を工学分野において追求するところである。工学分野でのジェンダー研究ともいえ、その斬新性は抜群である。さらに研究の段取りも精密である。たとえば、修士論文で戦前期の東京を取り上げ、ジェンダーと都市政策の研究に取り組んだ後、東京大学21世紀COEプログラムに参加し、戦前期の大阪に焦点を移し、都市環境改善活動と女性の関わりを研究し、今後は研究範囲を戦後期に拡大し、アメリカなど外国との比較研究を構想し、博士論文へと発展させる壮大な研究計画にも期待される。また行政資料、地域・地方資料、女性団体資料、女子大学関係資料など様々な領域の多様な原資料の収集と分析を綿密に行っている点が研究の信憑性を高めている。このことは視点の斬新さとともに評価に値する。

受賞者：菊地 栄氏 （立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科）

現代における出産はあまりにも病院での医療的側面に中心が置かれ、子を産む女性の自然なありようが無視されていることに着眼した点が新鮮である。著書『イブの出産、アダムの誕生』のなかでは、出産の歴史や各国の現代出産事情をふまえ、どういいう出産のありかたが望ましいかを具体的事例をあげながら論じ、出産が人間の自然な営為であることを忘れがちな現代に警鐘を鳴らしている。また菊地氏は出産準備クラスや出産体験の意識調査、生まれたての赤ちゃんの写真展など、多岐にわたる活動を通して女性たちが産むことに関し抱えている問題を捉え、解決しようと努力している。活動と研究の今後の成果が期待される。

以上